

19世紀中葉におけるグスタフ・キューン社発行の 文学的テキスト付きビルダーボーゲンについて

宇佐美 幸彦

はじめに

グスタフ・キューン社が19世紀初期から20世紀前半まで100年以上にわたって発行したビルダーボーゲン（以下ボーゲン）のうち、本稿では中期の文学的テキストを伴った作品について論じる¹。ここで中期というのはおおむね1848年の三月革命の時代から1870年の普仏戦争の時代までの時期である。おおむねと述べるのは、ボーゲンには書籍や雑誌のように発行年度が記載されていないので、正確な発行年度が不明なことが多いからである。この時期はドイツの歴史の上でもプロイセンが台頭し、近代統一国家へと歩む重要な時期であり、関税同盟、三月革命から1871年の第二帝政の成立までとして区切られる時期でもあるが、キューン社にとっても、ノイルピーンという地方都市の出版社から、ドイツ全土を代表するビルダーボーゲン発行所として経営拡大する時期であり、この発展を支えたグスタフ・キューン（Gustav Kühn, 1794-1868）が1868年に亡くなり、息子のベルンハルト（Bernhard Kühn, 1819-1889）が経営を引き継ぐという事情により、会社の歴史の上からも区切りが付けられる時期でもあった。

この時期の歌や物語を伴うボーゲンを、テーマによって5つの分野に分け、それぞれの作品の特徴について述べたい。これらにおいては、物語形式の作品は比較的少なく、歌謡風のテキストを伴うものが多い。重

1 グスタフ・キューン社の歴史と、初期、中期、後期という大まかな3つの時代区分については、拙稿「グスタフ・キューンの文学的テキスト付き初期ビルダーボーゲン」（関西大学『独逸文学』第54号、2010年、9頁以下）を参照されたい。

要な作品に注目し、(1)恋愛、(2)幸福な家庭、(3)社会と恋愛、家庭生活における問題提起、(4)働く若い女性たち、(5)機知と滑稽という分野に分けてみたい。

第1節 恋愛

(1-1) グスタフ・キューン社の全体的な編集方針は、かならずしも「恋愛」をテーマにしたボーゲンを発行することに偏っていたわけではない。とりわけ1848-49年の時期はドイツでは三月革命による政治的混乱（市民の蜂起、市街戦）、デンマーク戦争という大きな政治的・社会的事件が次々に起こり、これらを報道するというイラスト入り新聞の役割をキューン社のボーゲンは果たした。97号まで連続シリーズで発行された「新絵入り新聞、注目すべき1848年」の一連のボーゲンは、生々しい市街戦や戦場の様子を報じており、写真のなかった時代の視覚的情報を得るためにもたいへん貴重な資料として残っている。これらのボーゲンはもっぱら時事的な報道に向けられている。外国との戦争の報道では、国民感情が優先され、政治支配者（ドイツ軍）の側の見方とボーゲンの報道姿勢とはほとんど変わらないが、市民の暴動に関する報道においては、市民側からの観点を示すボーゲンもあり、たいへん興味深い²。

しかしこうした政治的、軍事的センセーショナルな報道の反動からなのか、あるいは大衆的報道機関として、政治的な部分と文学的な部分を両立させ、総合的に論ずる姿勢の表れなのか、1850年ごろのキューン社のボーゲンの中には多くのロマン主義的な恋愛を取り上げた作品が発行されている。キューン社の中期ボーゲンの中で、とりわけ恋愛を賛美している作品のタイトルと、歌いだしの例をあげれば次のようなものがある（同じ発行番号に二つのタイトルがある場合は、1枚のボーゲンに2作品が掲載されているものである）。

NRGK-02379『貞節な歩兵とその恋人』（Der treue Infanterist und sein

2 1848年の政治的事件を扱ったボーゲンについては、Angelika Iwitski: *Europäische Freiheitskämpfe, Das merkwürdige Jahr 1848, Eine neue Bilderzeitung von Gustav Kühn in Neuruppin*, Berlin 1994に詳しく述べられている。

- Liebchen)³、「つらい別れの時がやってきた」(Sie naht, die bittere Trennungsstunde)
- NRGK-02379 『若い親方とすましたフィアンセ』(Der junge Meister und die spröde Braut)、「美しい人よ、そうかたくなにならずに」(Laß dich, Schönste, doch erweichen)
- NRGK-02381 『ひょうきんな男』(Der Spaßvogel)、「僕にはかわいい彼女が」(Ich hab' ein hübsches Mädchen)
- NRGK-02383 『舞踏会の男爵と裕福な令嬢』(Der Herr Baron und das reiche Fräulein auf dem Balle)、「離れていても僕の心は君のもと」(Von dir geschieden bin ich bei dir)
- NRGK-02383 『アントン、剣を納めなさい』(Anton steck den Degen bei)、「わが人生にも希望がわいた」(Mir auch war ein Leben aufgegangen)
- NRGK-02394 『ああ、わが天使よ、僕はどんなに君を愛しているか』(O, mein Engel, wie lieb ich dich)、「本当は君に伝えたい」(Ich möchte dir so gerne sagen)
- NRGK-02394 『友の妻を愛してはならぬ』(Du sollst nicht deines Freundes Weib lieben)、「わが心、ただ思うのは君のこと」(Du, du liegst mir im Herzen)
- NRGK-02396 『愛の花咲く時』(Die Rosenzeit der Liebe)、「いちばんの美人は」(Wenn man mir ein Mädchen nennt)
- NRGK-02396 『バラにはトゲが』(Keine Rosen ohne Dornen)、「君が僕のものにならぬなら」(Kann ich dich denn nicht gewinnen)
- NRGK-02397 『恋する若い男』(Der verliebte junge Herr)、「愛の心を持つ男たち」(Bei Männern, welche Liebe fühlen)
- NRGK-02527 『牧師の娘ロツテと若い執事』(Pfarrers Lottchen und der junge Hofmeister)、「立派に飾って伯爵夫人と思うほど」(Ihr denkt, das ist 'ne Gräfin, so stattlich angethan)
- NRGK-02527 『クリューガーのイエツテと裕福なシュルツェの息子』

3 NRGKとはNeuruppin Gustav Kühnの略記で、NRGK-02379はグスタフ・キューン社発行2379番のボーゲンである。

(Krügers Jettchen u. der reiche Schulzensohn)、「シユルツェ農場は村一番の収穫だ」(Des Schulzen Gut im Dorfe 'ne Muster-Wirthschaft war)

NRGK-02800『勿忘草』(Vergißmeinnicht)、「今日、彼からこの花をもらったの」(Heut' gab er mir dies schöne Blümchen)

NRGK-02800『燃える恋』(Brennende Liebe)、「どうして頭を傾げて考え込んでるの」(Was neigst Du jetzt so sinnend denn Dein Haupt)

NRGK-02990『わが彼女』(Mein Mädchen)、「いちばんの美人は」(Wenn man mir ein Mädchen nennt)

NRGK-02990『恋のためいき』(Liebes-Seufzer)、「可憐なこの花々が」(Ach wüßten's die Blumen, die kleinen)

NRGK-02991『愛する人の近く』(Die Nähe des Geliebten)、「日の光、海にさすとき」(Ich denke dein, wenn mir der Sonne Schimmer)

NRGK-02991『至福の思い出』(Selige Erinnerung)、「月明かりの中」(Ich ging im Mondenschimmer)

NRGK-03047『望みを持つ娘』(Die hoffende Jungfrau)、「闇に包まれたこれからのことを」(Der Zukunft Dunkel zu enthüllen)

NRGK-03047『若者』(Der junge Mann)、「男の世界の表面は」(Das Äußere der Männerwelt)

(1-2) こうしたタイトルを見ただけでも、いかにこれらの作品がロマン主義的な言葉遣いの影響下にあるかが判明する。この中のいくつかの代表的作品を詳しく検討してみたい。まず NRGK-02394 を取り上げたい。このボーゲンには2つの作品が掲載されている。一つは『ああ、わが天使よ、僕はどんなに君を愛しているか』(O, mein Engel, wie lieb ich dich) というタイトルで、このタイトルに続いて次の詩が掲載されている。

本当は君に伝えたい、／どんなに君を思っているか。
でもまだ今は、そんなこと、／とてもできぬ、としか言えぬ。

毎日、歌に歌いたい、／どんなに君を思っているか。

それなのに、この私には、／歌うことなどできやせぬ。

口に出すことできぬけど、／愛の炎は燃えさかる。

私のこの目、見ておくれ、／君への愛にあふれてる。

どんなに君を思っているか、／私の目には書かれてる。

読んでおくれ、目の中に、／言葉に出して言えぬこと⁴。

この歌詞のみを読めば、片思いの若者がたいへん内気で、自分の愛を告白するすべを持たず、片思いの苦しみを一人で耐えているように見える。しかしボーゲンの絵は、この片思いの恋がすでに実った段階を示している。大輪のバラが咲き乱れる立派な庭園の中で裕福な服装をした男女のカップルが腰かけており、男性が女性に体を寄せて、愛の告白を行っている様子が描かれている。そしてこの歌詞の後には次のような趣旨の説明が散文で付け加えられている。

愛するエドゥアルト、私もあなたのことを言葉で言い表せないほど愛しているわ。この人生のもっとも厳かな瞬間に、喜びも苦しみも共にして永遠にあなたに忠節をつくすと誓うわ。

彼：君の愛に力を得て、君の厳格な父君に君との結婚を申し出たい。僕は君に苦労などかけない生活を築くつもりだ。もう一度接吻をし、それから僕たちの運命を決定する君の父君の所へ行こう。

この絵の描写および散文の説明と歌の内容との間には大きなずれがある。歌では愛の告白ができないで苦しむ片思いの恋人の気持ちが歌われているのであるが、ボーゲンの全体の状況はすでに愛の告白がなされ、接吻を繰り返し、親元へ行って結婚の正式な申し出をしようということになっている。歌詞ではとても愛の告白などできないとされているのに、

4 本稿で紹介する作品のテキストは、ノイルピーンのビルダーボーゲン・センター（Bilderbogenzentrum Neuruppin）で筆者が調査したボーゲンの資料に基づくものである。

それがどうして告白できたのであろうか。明らかに詩の内容と説明の散文とは矛盾しているのではないだろうか。指摘せざるを得ないのは、ロマン主義文学の一つの中心テーマである「永遠の分裂状況」「世界の断絶」「心の悩み」という緊張関係が、ここではビーダーマイアー的な「幸せの達成」という小市民的現実肯定に代えられてしまっていることである。

この歌はミュヒラー（Karl Friedrich Mühler, 1763-1857）が作詞したもので、たとえば *Lieder zur Gitarre, Wandervogel-Album*⁵ のような歌謡集にも取り上げられおり、民衆によく知られていたと思われる。ミュヒラーはプロイセンの軍事顧問官を務めた官吏であったが、1806年のナポレオン戦争での敗北以後、文筆家に転じ、愛国主義的な文学作品を執筆した人物である。この詩は片思いに悩む純朴な青年の気持ちをロマン主義的に歌ったものと理解できる。ギルシュナー、アルカン、ドーム、エマヌエルなどによって作曲されている。

NRGK-02394のもう一つの作品は『友の妻を愛してはならぬ』（*Du sollst nicht deines Freundes Weib lieben*）というタイトルである。ここでは次のような詩句が掲げられている。

わが心、ただ思うのは君のこと。
わが目ぶた、そこに浮かぶは君のこと。
わが胸を痛くするのは君ばかり。
君知るや、いかに深きか、われの愛。

君のこと、われが愛しているほどに、
われのこと、君も愛してくれまいか。
なやましく、愛のうずきをいつまでも
このわれは君に感じているばかり。

でもわれは、高ぶる心なだめつつ
君のこと、信じていてもいいだろうか。

5 Häselser Adolf (hrsg.v.): *Lieder zur Gitarre, Wandervogel-Album*, II.Bd., Domkowsky & Co, Hamburg, um 1914, S.178.

われのこと、どうか信頼してほしい。
君知るや、いかに深きか、われの愛。

遠くにて、すてきな君のその姿、
このわれの心にくっきり浮かんだら
そのときに、われが望むはただ一つ、
君とわれ、二人を愛が結ぶこと。

この歌は作詞者・作曲者不詳のようであるが、ドイツ民謡として有名な曲であり、遠くにいながらも純真に恋人のことを思い続けるという内容である。ここには「友の妻を愛する」などという不純なことは一言も語られていない。図版はこの歌の内容とは大きくかけ離れている。一人で遠くにいる恋人のことを思っているのではなく、バラの花咲く立派な庭園で、着飾ったひと組のカップルが手を取り合っている。遠く離れているどころかたいへん接近しているのである。「友の妻を愛してはならぬ」というタイトルは、不倫の関係を思わせるような、少しいかかわしい印象を与える。キューン社のボーゲンの基本方針は品行方正な市民道徳を貫くという点にある。「友の妻を愛してはならぬ」とされているわけだから、この基本方針を逸脱しているわけではないが、不倫関係を取り上げること自体が、興味本位のような印象を与え、市民を道徳的に教育しようとするキューン社の立場にふさわしくないようにも思われる。しかし詩句の下の散文の説明文を読めば、この不倫関係は現実にはなかったこととされており、やはりこのボーゲンにおいてもキューンの道徳観の基本姿勢が貫かれていることが判明する。散文の説明文では、まず、引用の歌のように自分の夫が他の女性と愛を語り合っていると妻からの苦情がある。しかしそれは夫のフリッツが妻の嫉妬深さをからかうために仕組んだ芝居であった。従妹のクララとフリッツはわざと大きな声で愛を語り、それを妻とクララの夫に聞かせたのであって、それは単なる芝居にすぎなかった。結局は、妻は嫉妬深くなるべきではないとして、女性の忍耐が教訓として主張されている作品である。図版をよく見ると左の奥で木陰に隠れて聞き耳を立てているような女性が描かれていることに気づく。これが嫉妬深く詮索好きな妻なのであろう。いずれにせよ、

この作品においても、遠くにありながらも一途に愛を貫こうとする純真なロマン主義的真剣さが、ふざけた愛の芝居に転用され、しかもそれが妻の嫉妬深さに対する道徳的教訓のために用いられているわけであるから、このボーゲンの世界はロマン主義的本質から大きく逸脱していると言わざるを得ない。

(1-3) 次にNRGK-02990を考察してみたい。リーデルらの編集による本によれば1855年の発行である⁶。ここにも二つの作品が載せられており、一つは「わが彼女」(Mein Mädchen)というタイトルで、このボーゲンには絵と詩句があるのみで、散文の説明は付けられていない。詩句は次のようなものである。

いちばんの美人は誰か／あげてみよ、さあ、その名前。
男たち、皆、取り入ろうと／熱上げる、それは誰だろ。
それこそは、あの子以外に／ありえない。それぞわが彼女。

白ユリと赤いバラとに／そっくりと誰もが語る。
表情の一つ一つが、／求めてる、愛撫をしてと。
それこそは、あの子以外に／ありえない。それぞわが彼女。

握手する小さき手と腕、／皆、褒める、その柔らかさ。
手に抱く、すてきな体、／うっとりとするほどの脚。
それこそは、あの子以外に／ありえない。それぞわが彼女。

このボーゲンの図版では、春祭りの飾り柱の周りで輪舞を踊る若い男女を背景に一人の着飾った美少女が大きく描かれている。このボーゲンでは説明文はないので、この詩句の讃える美少女がそのまま描かれていると判断できる。この図版の娘は、着飾ってはいるが、背後の村の祭りで踊る若者たちと同じ階層の平民であろうと思われる。民謡風の詩句の

6 Lisa Riedel und Werner Hirte, hrsg.v.: *Der Baum der Liebe*, Eulenspiegel Verlag, Berlin, 2. Aufl.1982 (1981), S.158f. (以下 R-1)

基本的性格がボーゲンの図版にも素直に示されているといえよう。この詩はヴァイセ (Christian Felix Weiße, 1726-1804) が書いた⁷もので、民謡調の歌としてよく知られたものであった。

この歌はキューン社に好まれていたようで、NRGK-02396にも採用されている。この作品での図版は、裕福そうな建物の中で若い将校と着飾った娘が腕を組み合っている様子を示している。歌詞の上には『愛の花咲く時』(Die Rosenzeit der Liebe) というサブタイトルがあるが、図版の上には『裕福な領主の娘ローザムンデと美男の大尉』(Rosamunde, das reiche Gutsfräulein und der schöne Hauptmann) という題が掲げられている。ヴァイセの詩句はNRGK-02990と全く同じであるが、そのあとに散文の説明が付け加えられている。その内容はおよそ次のようなものである。

彼女：お世辞の上手なあなたはどこでもそんなことを言うのでしょうか。新婚時代だけは甘い生活をして、あなたのような人たちはすぐにかわいそうな妻を忘れ、バラの花を折りに行くのじゃないの。

彼：とんでもない、美しいお嬢さん。私はそんな連中とは違います。まず私はあなたを妻として都へ連れて行き、冬の間は舞踏会、オペラ、社交パーティ、表敬訪問で楽しんでみましょう。春がやってきたら、いとまごいをして私たちのすばらしい領地へ行き、私は管理の仕事をし、あなたは静かな自然の中で楽しい生活を送り、花や鳩の世話をしてください。

このような説明から、NRGK-02396では領地を所有・経営する貴族の御曹司とその花嫁の幸せな上流階級のカップルの登場という設定になっている。ここでは民謡調の歌謡で通常登場する民衆ではなく、一般庶民にとってはいわば憧れの対象のような上流階級の世界が描かれているといえよう。したがって詩句の素朴な民謡風の調子と図版とではいささか違和感があるように思われる。

7 Weiße, Christian Felix: *Kleine lyrische Gedichte*, II.Theil, Wien, Schrämbl, 1793, S.26f.

NRGK-02990のもう一つの作品は『恋のためいき』（Liebes-Seufzer）というタイトルで、次のような詩句が掲げられている。

わが胸の、大きく深きこの傷を
可憐なこの花々が知ってれば、
このわれとともに涙を流しつつ、
この痛み、きつと癒してくれよう。

わが胸の、たいそう病んで悲しきを
飛びきたるあの鶯が知ってれば、
ほがらかに、陽気な歌をさえずって、
ふさぎこむ気持を晴らしてくれよう。

わが胸の、この苦しみを空の上
金色に輝く星が知ってれば、
夜空からわれの所へ舞い降りて
わが胸に慰め与えてくれよう。

だがそれを知っているもの誰もなし。
わが胸の痛みを知るはただ一人。
それこそは、この心をばずたずたに
引き裂いたあの人自身にほかならぬ。

この詩は失恋の苦しみを歌ったものである。これはハイネ（Heinrich Heine）の『抒情挿曲』22番の詩を転用したものである。シューマン（Robert Schumann）の作曲した『詩人の恋』8番としてよく知られている歌である。ただしハイネの詩では4連目の「ただ一人」と「あの人」は *eine / sie* と女性になっているのに対して、このボーゲンでは *einer / er* と変更されている。つまりハイネの詩で失恋しているのは男性であるのに対して、ボーゲンで失恋しているのは女性なのである。図版では、裕福そうな部屋の中で立派なソファーに上等な衣服に身を包んだ若い女性が一人座り、花瓶の花や切り花がこの人物を取り囲むように描かれて

いる。この図の描いている場面は、詩における叙述での1連目に対応している。詩の第2連以下の鶯や星は図版では描かれていない。ハイネの詩では絶望的な失恋の苦しみ、自分の心を引き裂いた相手への恨みの感情が強調されているが、このボーゲンでは裕福なお嬢さん風の人物が上等なソファーにふんぞり返るように座っているの、詩に歌われているような深刻な悩みはかなり薄められているような印象を受ける。

(1-4) NRGK-02991はリーデルらによれば1855年の発行である⁸。このボーゲンの『愛する人の近く』(Die Nähe des Geliebten) という作品も詩句のみが掲載されており、説明の文はない。

日の光、海にさすとき、／私は思う、あなたのことを。
月明かり、泉に映り、／私は思う、あなたのことを。

遠き道、ちり舞い上がり、／私に見える、あなたの姿。
夜の橋、旅人ひとり／足を震わせ歩むときにも。

波の音、鈍く押し寄せ、／私に聞こゆ、あなたの声が。
しんとして、静まる林、／私は歩む、声がせぬかと。

どんなにか離れていても、／あなたの場所は、私の近く。
日は沈み、星はまたたく。／ああ、あなたさえ、ここにいるなら。

この詩はゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe) の作である。ベートーヴェン (Ludwig van Beethoven) やシューベルト (Franz Schubert) の作曲もあり、たいへんよく知られたリートの一つである。図版は着飾った美人が前面に大きく配置され、背後では若い人々が戯れている様子が小さく描かれている。この大きく描かれた美少女が離れた所にいる男性の恋人のことを思い続け、心の中ではいつもそばに感じているという設定になっている。ゲーテにおいてもタイトルは *Die Nähe des*

Geliebten、つまり『愛している男性の近く』となっているので、ゲーテは男性でありながら、女性の立場に立って遠くにいる恋人のことを思う心を書いたのである。NRGK-02990とNRGK-02991の図版は連続して一人の美しい女性を大きく描いており、いわば「美人画」シリーズのような作品である。したがって、詩のテーマは男性からの憧れであったり、女性の側の恋の苦しみであったりするが、これらの文学的なテキストは単なる飾りとして付け加えられただけで、このシリーズは美しい女性を図版で示すことの方が重要であったと思われるようなボーゲンである。

NRGK-02991のもう一つの作品は『至福の思い出』（*Selige Erinnerung*）である。これには次のような6連の詩が載せられている。

月明かりの中、私は歩いた、／エーミールと手に手を取って。
そのとき、胸に覚えた感激、／それを私は忘れはしない。

彼の瞳に銀に輝く／月のきらめき、浮かんで映り、
その唇はほんのりあわく／やわい光につつまれていた。

私の眼から苦味を帯びた／愛の涙があふれて流れ、
口からもれたかすかな溜息、／エーミールの耳に届いた。

彼は黙った。でもその眼には／涙一粒、ふくらんでいた。
野辺の泉に映るがごとく／その涙にも月が浮かんだ。

私は黙って涙を見てた。／彼はそのこと知らぬ様子で、
小さな月が涙とともに／彼の顔へと流れて落ちた。

ああ、その時に、月も地球も／私の前で姿を消した。
そこにいたのはエーミールだけ。／これより至福な時はなかった。

この詩の原作はシュトルベルク（Friedrich Leopold Graf zu Stolberg-Stolberg, 1750-1819）が1779年に発表した「小曲」（Lied）である。原作では男性が女性との恋を思い出しているという設定で、エーミールでは

なく、リューダ (Lyda) という女性の名前が挙げられ、「彼は」などの男性形の部分は「彼女は」という女性形になっている。美人画シリーズの一環として、この作品の図版も着飾った女性が中央に大きく描かれている。背景はバラの花咲く公園で、何人もの人が散歩したり語らったりしている様子が小さく描かれているが、月明かりに照らされた夜の状況ではなく、パラソルのようなものを持っている人物もいるので、日中（おそらく午後）の時間帯のように見える。もっとも詩作品でも過去の思い出として語っているのであるから、思い出している今の時点は夜とは限らないかもしれない。シュトルベルクの詩にはシュルツ (Johann Abraham Peter Schulz, 1747-1800) による作曲がある。

(1-5)「恋愛」をテーマにしたボーゲンの代表的な例をいくつか見たわけであるが、以上の観察から次のようにまとめることができるのではないだろうか。

① ボーゲンでは、ロマン主義的な民謡調の恋愛詩が引用されていることが多い。有名な詩人や作曲家による歌を借用したものもあり、歌の知名度に頼ってボーゲンを発行し、収入を得ようとする経営戦略を見て取ることができよう。

② 作品の多くで詩句と図版の基本的方向が食い違っている場合がある。詩句と図版はそれぞれ別々に人々の関心を呼ぼうとしているように思われる。詩句は甘い言葉と調べによって、人々を魅了し、図版は美人や優雅なカップルを描いて、風俗画として売り込もうとしたように考えられる。

③ ロマン主義的な詩句では、たとえば失恋における世間との断絶、社会と自我との対立が、「世界苦」や「異郷での一途な愛」として緊張感の中に描かれているのに対して、ビルダーボーゲンの図版では、そうした真剣な悩みが芝居として茶化されたり、現状を肯定して小市民的満足の様子が描かれたりしており、こうした点が詩句と図版の基本的な対立点であろう。

第2節 幸福な家庭

(2-1) 恋愛のボーゲンにおいては、多くの場合、恋が実り、幸せな結婚にゴールインするという設定が多かったのと同様に、幸福な家庭生活を描き、鑑賞者がこれを模範にして家庭円満に暮らすようにという教訓的な一連のボーゲンがある。NRGK-04344『結婚による家族の幸せ』(Eheliches Familienglück)は1861年の発行である⁹が、「私はやさしい妻を見出し、／子宝にも恵まれた。／愛する家族という時が／私には最高の喜びの時間だ」と歌われ、図版にはバラや額付きの風景画がある立派な部屋で、優雅な服を着た夫婦と仲むつまじく戯れる四人の子供たちが描かれている。同じように家族や幸福な子供を描いたボーゲンには、NRGK-02756『両親の喜び』(Elternfreude)(バラの花咲く庭の背景に夫婦と二人の子供を描く)、NRGK-03125『人形と子供』(Das Kind mit der Puppe)(ボタンのような大輪の花飾りのある立派な建物のバルコニーで人形遊びをする金髪のかわいらしい女兒を描く)、NRGK-03175『母と子』(Mutter und Kind)(花咲く庭で小さな女の子をあやす着飾った母親を描く)などがある。

(2-2) 以上のボーゲンでは幸せな家庭を描くことによって、あるべき生活を示すのであるが、NRGK-04343はあからさまに「貞淑な女子」を教育するという目的を述べる作品である。1861年発行¹⁰のこの作品のタイトルは『愛すべきドイツの乙女たちよ』(Meine Liebenswürdigen Jungfrauen Deutschlands)という呼びかけである。図版では、テーブルの上に紅茶のポットとカップが並んでいる大きなサロン風の部屋で、豪華な服で着飾った若い美女たちが大勢取り囲み、中央にはただ一人の男性が立ち、女性たちに何か語りかけている様子である。図版の下の記事部分では、タイトルに続いて、次のような前置きが散文で書かれている。

もしあなたが下記の詩句で述べられているような特質を持っている

9 R-1

10 R-1

ならば、結婚しようと考えているすべての若い男性たちはあなたを
獲得しようとする命になり、そしてこれまで人々がしばしば述べてき
たように結婚は天国で結ばれるのではなく、この世で結ばれるに違
いありません。

こうして求婚をする若い男性の側から、妻のあるべき特質について第
1 連から第7 連まで男性の要求が韻文で述べられる。第1 連は

いつの日か、私が求婚するならば
わが妻はぜひ愛らしい人がよい。
美人でも心がなくてはおことわり。
学のある妻に負けるのも願ひ下げ。
その通り、私が求婚するならば
わが妻はぜひ愛らしい人がよい。

ということで、「愛らしい」(hold) 女性が求められる。女性は表面的な
美しさだけでは不十分で、学識を持っている場合は、男性に好まれない。
望ましい妻の最重要の条件として、心が愛らしい、つまり従順で、相手
を快適な気分にすることがまず求められている。第2 連ではこの「愛ら
しい」(hold) という言葉には魔力が秘められており、「5月の朝」のよ
うに「気高く純粋な感情」を醸し出すことが要求されている。第3 連で
は「温和なまじめさにより品位がもたらされる」ことが要求され、さら
に夫の「反照」(Wiederschein) となり、夫の「第二の自我」となるこ
とが求められる。ここには夫婦の間の対等な関係はなく、男性が優位を
保ち、女性がそれに付随すべきであるという考えが現れている。第4 連
の前半では、妻は詮索などせず、心で感じ取るべきだと述べられ、後半
では夫が失敗を犯したときには、「さげすんだ言葉を吐き／あるいは泣
いたり、たいたり、けんか騒ぎをして／彼女が私の支配者になるよう
なことがあってはならない。／そうではなくただ愛のみで接してほしい」
と都合のいい要求がなされている。第6 連では「まなざしに忠誠による
協調の印」が現れていることが求められる。最後の第7 連では、臨終に
際して夫は妻の目の涙に「慰め」を見出し、「あの世でも彼女が私のもの

のであること」が望まれている。こうした叙述を見ると、キューン社のボーゲンにおける家庭円満と幸せな結婚は、女性の側の忍耐と服従の上に成り立っていたと考えざるを得ない。

第3節 社会と恋愛、家庭生活における問題提起

(3-1) キューン社のボーゲンでは恋愛が結婚という幸せな結果をもたらし、家族においては(妻の犠牲の上で)円満に暮らすという状況設定をしている作品が圧倒的に多いのではあるが、中には貧富の差を意図的に持ち出したり、女性側からの抗議が述べられたりする作品もある。NRGK-04348『貧しいあばら家での愛、上流社会での愛』は、貧富の差がある二組のカップルを対比しながら描いた作品である。この作品は1861年の発行である¹¹。『貧しいあばら家の愛』には次のような詩句がある。

貧しき少年、愛情こめて／娘に捧ぐ、贈り物。
苦労を重ね、帽子の中に／鳥の巣入れて運び来た。

娘は驚き、小さなヒナに／胸一杯に、感激す。
娘はヒナを育てる決意、／二人の愛が続くように。

貧しい家でも、まことの心、／愛は燃える、暖かく。

これに対して『上流世界の愛』では、菌が浮くような言葉で男性が求婚し、女性がこれを快諾するという詩句が掲載されている。上流社会のカップルを描く図版はたいへんエレガントな服を着て、言葉遣いもたいへん丁寧であるが、羊が背景に描かれた田舎の風景の中で麦藁帽のようなつば広の帽子に鳥のヒナを入れてこれを贈り物にしようとするはだしの少年の途な愛の方がより魅力的である。このボーゲンでは、上流階級のカップルと田舎の貧しい男女のカップルが対比されて描かれていることが重要である。上流階級の幸せを描こうとする傾向のあるキューン

11 R-1

のボーゲンの中で、わざわざこうした階級差を持ち出したのは、幅の広い社会層に対するキューン社の配慮の表れであろう。

二つの絵でコントラストを構成する作品には、NRGK-02378『都市の愛、田舎の愛』(Liebe in der Stadt, Liebe auf dem Lande)、NRGK-02825『都市の花嫁、田舎の花嫁』(Die Braut in der Stadt, die Braut auf dem Lande)、NRGK-03110番『都市の求婚、田舎の求婚』(Der Heirathsantrag in der Stadt, der Heirathsantrag auf dem Lande)がある。いずれのボーゲンにおいても都市の方がやや洗練されており、田舎の方が幾分無骨のような印象を受けるが、田舎の状況を描いたボーゲンにおいてもふんだんにバラの飾りが加えられており、服装も立派な身なりで、中流以上の暮らしを前提としているように見える。ここでは経済的格差を問題にしているというよりも、都市でも田舎でも愛に変わりはないことを強調しているようである。

(3-2) NRGK-04263は横長の画面に7人の美しい娘が勢ぞろいし、真ん中にその父親を配置している。この作品は1860年の発行¹²で『仕立屋と7人の娘』(Der Schneider mit seinen 7 Töchtern)というタイトルである。父親は娘たちを嫁がせたいと言い、娘たちを紹介し、嫁がせる相手の職業の希望を述べる。29歳の長女レオノーレはピアノ調律師 (ein Piano-Stimmer) に、次女レオンティーネは守衛 (ein Wächter) に、三女シャルロッテは肉屋 (ein Schlächter) に、四女ヘレーネは靴屋 (ein Schuster) に、五女ルイーゼは葬儀屋 (ein Leichenbitter) に、六女ヘンリエットは椅子職人 (ein Rohrstuhlflechter) に、末娘アリユードは太った小作人 (ein dicker Pächter) にというわけであるが、ここでは花婿になる人物の職業が述べられているだけで、その人の性格とか能力、容姿、財産、家族関係などは一切問題にされない。また結婚する娘たち当人の希望は何も書かれておらず、父親がすべて決定することになっている。なぜ父親がこのように焦って、特定の職業さえ持っていれば、その男と結婚させるのかという理由は、第1連に述べられている。

わたしゃまじめな仕立屋だ。／かつては実入りも多かった。
ところが今は落ちぶれて、／家庭の困窮、増すばかり。
わたしの娘七人を／養うことなどできやせぬ。
時代はますます悪くなる。／財布はますます軽くなる。

つまり父親の焦りの原因は経済的困窮であったのである。父親の強権的な発言は問題であるが、「時代はますます悪くなる。／財布はますます軽くなる」という部分はレフレインとして各連で繰り返され、社会への恨みや批判が表わされる。この点で、第2節で述べた夫婦の愛に基づく「幸福な家庭」を描くボーゲンと、この作品は大きく異なっている。子宝に恵まれた家庭がいつも幸福とは限らないのである。ところで詩句では困窮した家庭が述べられているのであるが、図版はそれに対応しておらず、娘たちの服装はあでやかである。これも詩句とかけ離れて、美しい女性を描こうとする美人画路線なのかもしれない。あるいは7つも職業をあげれば、それに該当する男性も多いので、このような美人と結婚できることを期待させるキューン社の販売作戦であろう。

(3-3) 妻は従順で夫に従わなければならないという家庭観が一般的である中で、NRGK-02812『現代女性の要求』(Ansprüche der modernen Frauen)では自己主張する女性が登場する。1854-55年に発行された¹³この作品はたいへんユニークなので、詩句を全文紹介したい。

新聞読んで、たばこ吸うだけ、

あなたは私と会話もしない。

女は会話を楽しむものよ。

退屈なんて、苦痛そのもの。

そんなことなら、明るいうちに

眠り込む方がまだずっとましよ。

なんでこんなになってしまったの。

新婚時代は会話したのに。

仕立屋さんと帽子屋さんが
来ると、あなたはぶつくさ喚く。

私が衣装を測ってもらい、
はやりの帽子やら洋服を
試してみたり、買ったりしても
そのときあなたは黙ってるべきよ。
ところがあなたはさんざん喚く。
あなたの口などないといいのに。

どうかあれこれ私のことに
世話など焼かずにいてくださいな。

あなたはしっかり分別を持ち、
私の邪魔をしないでいてね。
もっぱら妻の問題などと
あなたはまったく関係ないわ。
私の考え、それがすべてで、
あなたは何の役にもならない。

私のお金、足らなくなれば、
あなたが借金、払ってください。

借金取りが押し寄せ来ても、
どうかがみがみ怒らないでね。
あなたはとても善良なもの。
罵詈雑言を浴びせないでね。
あなたへの感謝、忘れないから、
どうかほどいて、財布のひもを。

私にお金、たっぷり渡し、
用途については聞かずにいてね。

私がいつもへまをするのは
あなたもきつとご存じのはずよ。
しかしあなたは、私が無駄に

浪費をすると罵るばかり。
どうかそんなこと、忘れて、私に
金庫の鍵を渡してください。

私はずっとあなたを愛し、
あなたにいつも忠実つくす。

あなたに誓い申し上げます、
他の男性を好きにならぬと。
純金のごとくあなたに誠実。
(誰も聞いてはいないでしょうね?)
だから私を試すことなど
しないでください。無意味なことよ。

どうしていつも家だけにいるの？
さあパーティへ連れて行ってよ。

静かな家じゃ、この私には
ふさぎの虫と頭痛が襲い
薬や香水でも治らない。
宴の席へ連れて行ってよ。
そこでワルツとギャロップを
踊れば、私、きっとよくなるわ。

あなたが何も私の言うこと
聞いてくれねば、その時は…。

私の言うこと、あなたが聞けば、
私も帽子、買いはしません。
私の言うこと、もし聞かぬなら、
きっと茶番の劇が始まる。
私の言うよう、ならぬのならば、
無理やりそうしてもらいます。

ここでは、NRGK-04343における「愛らしく」、従順な、「あるべき妻

の姿」とは全く正反対の女性が登場する。心の中では思っている、現実的には男性に経済的に依存する妻の立場からは正面切って「要求」を持ち出すことは難しかったと想定されるが、こうした女性の声がかこでは代弁されている。全部で8項目の「要求」がなされている。(1)新聞など読んでなくて、談話を楽しみたい、(2)仕立屋や帽子屋が家へ来ても文句を言わないでほしい、(3)妻の問題に干渉しないでほしい、(4)妻の借金を払ってほしい、(5)無駄遣いしても金庫の鍵をあけてほしい、(6)情事を疑って、詮索しないでほしい、(7)パーティや舞踏会に連れて行ってほしい、(8)言うことを聞いてくれないと大騒ぎを起こす、というものである。

このボーゲンは二通りに解釈することが可能であろう。一つには、この主婦の要求は当然のことで、まだ家父長的な考えが強い中、たいへん勇敢で、先進的であり、女性解放の先駆けとして評価できよう。夫婦の会話を大事にすること、主婦の問題に干渉しない、金銭の使い道についていちいち詮索しない、情事を疑い試すことなどしない、舞踏会に連れて行く、というのはごく当たり前の要求である。服や帽子を買って浪費すること、借金のしりぬぐいをするなどのは、たしかに不当な要求かもしれない。しかしこれは夫が家計費の金庫を独り占めしているために生じることで、夫婦の関係が対等で、ともに家計の運営に参加していれば解決できることであろう。第2節でみたように男性の側からの要求のみがまかり通っている中で、女性の側から「要求」を発言するという設定がなされているという点だけで、この作品は画期的であると評価できよう。

第2の解釈は当時の社会通念からすれば、この要求がまじめなものだと考えることはあり得ないので、まったくの冗談と見なすものである。本論でもつばら文学的なテキストが掲載されている作品を取り上げているので、詳しく取り上げる余地はないが、ノイルピーンのボーゲンの中には一連のふざけた遊びの作品がある。たとえばエーミケ・リーメンシュナイダー社のボーゲンに『さかさまの世界』(Verkehrte Welt)という題の作品(NROR-3159)がある。「長靴が人間を磨く」、「月が人を見る」、「犬が人間を調教する」など常識の反対の世界を設定し、これを図に示すというたいへん面白い作品である。この関連で見ると、この主婦

の要求はあり得ない「さかさまの世界」なのかもしれない。当時の社会的通念では、こうした「跳ね上がり」の妻は家庭不和の元であり、「悪女」の典型で、このような女性が出現しては困るという戒めのために作成された作品と考えることも可能であろう。要求項目の中に正当性があるものがあっても、要求を持ち出すことが、「淑女」の条件に当てはまらなかったのではないかと考えられる。しかし21世紀の現在ではこうした古いタイプの女性観はなくなっており、当然のことながら、この作品における女性の要求は「さかさまの世界」ではなくなっている。

第4節 働く若い女性たち

(4-1) 第1節「恋愛」で扱ったボーゲンにおいても多くの若い女性が登場するが、そこでは恋に陥り、あるいは結婚して家庭を築く女性は無職という設定となっている。第4節では働く若い女性たちを取り上げる。ここでの女性の姿も着飾った衣服で描かれており、美人画シリーズと考えることもできるが、職業を持っているという点で、結婚だけがすべてという「お嬢さん」タイプの女性たちとは異なっている。当時、女性たちはまだ職業的に社会進出していなかったのではないかと想定されるが、これらの作品を見ると、女性たちもたくましく仕事をしていたということが分かる。

NRGK-02615「縫い子、編み物女」(Die Nähterin, die Strickerin)においては工作中的の美しい女性がそれぞれ描かれている。詩句ではこの縫い子が男よりもずっと勤勉に仕事に励み、家計を整え、食事を用意し、そのうえ細かい作業に精を出していることが讃えられている。また編み物女も単調な作業の繰り返しで、ともすれば眠り込んでしまいそうな退屈さにうち勝ち、いつも元気で靴下を編んでいるとされる。

(4-2) NRGK-03088『旦那様、何なりとご命じ下さい』(Befehlen Sie, mein Herr) (1855年発行¹⁴)ではタバコ売りの可憐な少女が描かれ、詩句は男性の客との対話からなっている。客が君の葉巻は君のかわいい

顔と同じくらいすてきだと言ひ、キスをさせてくれたら一箱ごと買おうと言う。娘は貧しくてこういう商売をせざるを得ないが、ふしだらなことはできません、ときっぱり断る。客は、「この墮落した時代に珍しく立派」であると感激し、金貨をプレゼントして、「君の道は厳しくいかがわしい。早くこんな道から足を洗い、働いて幸せになりなさい」と諭す。こうした会話から、またタイトルからも読み取ることができようが、タバコを売る相手はもっぱら男性ばかりで、こうした職業の女性はいかがわしい存在であったようである。図版では背景が壁のように無地なので場所を特定することはできないが、手に葉巻をもって販売している様子や会話の内容などから、おそらく酒場でテーブルを回りながらタバコを売っている娘のように推定される。

(4-3) NRGK-03121は『野菜売り娘』(Die Gemüsehändlerin) (1856年発行¹⁵)である。詩句はわずか4行で、町の市に出る野菜が私たちの昼食をおいしくする、というたわいのない内容で、むしろ美しい女性を描くことが大事な美人画の作品である。塔のある市役所のような建物を背景に色とりどりの野菜を売る娘が大きく描かれている。周りにはパイナップルやメロンのような豪華な果物などがぎっしりと並べられている。娘のいでたちは、リボンのついた黄色い幅広帽子をかぶり、黄色の地に赤い横線の入ったショールをまとして、たいへんあでやかである。

続くNRGK-03122は『花売り娘』(Das Blumenmädchen) (1856年発行¹⁶)である。この詩句も4行で、すばらしい花が人々の目と鼻を喜ばせ、退屈さや不機嫌は退散する、というありきたりのもので、美しい女性を描く美人画と考えていいであろう。大きな花を一輪胸のブラウスの真ん中にあしらひ、金色のブレスレットで飾った娘は、大きな花籠を両手に持ち、周りは植木鉢の花が取り囲み、蝶さえも描かれている。

(4-4) NRGK-03124『ウェイトレス』(Die Kellnerin) では酒場で

15 Lisa Riedel und Werner Hirte: *Der neue Blumengarten*, Eulenspiegel Verlag, Berlin, 1988, S.143f. (以下 R-2)

16 R-2

働く若い娘が登場する。詩句ではかわいい娘が給仕してくればワインもおいしく、すぐに二杯目を注文する、という内容の短い4行である。図版ではワインでなく、ビールが描かれている。地下酒場でジョッキを振りかざして氣勢を上げている4人の男性客が背景として小さく描かれ、前面にはビールジョッキを運ぶ可憐な娘が大きく描かれている。この絵では花飾りは全く描かれておらず、そのため幾分質素な娘のような印象を受ける。

NRGK-03126『酌婦』(Das Schenkmädchen)の図版では、背景に屋外のビアガーデンのような酒場が描かれ、前面にはワインのボトルとグラスを運ぶ美しい娘が登場する。娘はレースのついたしゃれたかぶり物を頭を覆い、青い服に小さな白いエプロンをつけた服装もエレガントである。この作品の詩句も短い4行であるが、「純真なまなごしをした娘よ、／なんの不運で君はここへ来たのか?」という同情が表明されている。酒場の酌婦にはいかがわしいイメージが付き物であろうが、こうした同情の裏には職業に関する偏見があるようにも見える。

以上、代表的な女性の職業を見てきたが、働く女性が力強く、魅力的であることが確認できる。しかし女性が活躍できる分野は限られていたことも判明する。公務員になる道は閉ざされており、官吏、教員という現在では女性でも当たり前の職業に、当時は女性が就いていなかった。また親方制度がある職人世界からも女性は締め出されていたので、親方を頂点とするパン屋、靴屋、肉屋などの職業にも就けなかった。この節で取り上げた女性たちの職業は販売や接待のサービス業あるいは内職的な仕事(縫物、編み物)である。

第5節 機知と滑稽

(5-1) 中期のキューン社の文学テキスト付きボーゲンは、若い女性を描いた「美人画」風のものが圧倒的に多く、美しい女性、愛し合うカップル、円満な家庭のどれ一つも描かれていない作品の数は少ない。しかし、この女性と家庭のボーゲン以外においても、面白い作品が発行さ

れている。NRGK-02975は『はずれ』(Die Niete) (1856年発行¹⁷) というタイトルで、宝くじ屋の前で男性が深刻そうな顔をして立っている。足元にはつぶれた帽子と、はずれの宝くじの券が投げ捨てられている。詩句のテキストでは、彼は最後の金を宝くじにつぎ込み、はずれとなってしまう、「彼は髪を荒々しくかきむしり、俺など生れて来ねばよかった、と叫んだ」とある。よく見ると男のズボン裾が破れ、服の両ひじの部分にも大きな穴があいている。全財産を宝くじにつぎ込んだ男の哀れな姿を滑稽化して描いているが、ここには博打や射幸行為にのめり込むのではなく、まじめに働きなさいというキューン社の道徳的メッセージが込められている。

(5-2) NRGK-02320『猿の散髪屋』(Der Affe als Barbier) (1850年発行¹⁸) は16コマの画面からなる漫画風物語である。文章は散文で書かれている。主人公の猿が散髪屋になり、猫を椅子に座らせて剃刀で毛を整えようとする。そこへ女中がやってきて、大騒ぎになる。猿と猫は共同住宅の大屋根へ逃げ、追っ手から逃れようと煙突へ飛び込んだ。猿と猫は病人の部屋の暖炉まで転げ落ちた。それまで痛風で歩くこともできなかった病人は、突然、お化けが出たと思い、ベッドから飛び起きて、階段を駆け下り、医者の部屋へ走り込んだ。追ってきた猿は病人の肩に、猫は医者肩に飛び乗って大騒ぎになるが、とうとう猿の飼い主がやってきて騒ぎを起こしたことを詫びた。しかし病人は歩けるようになったことを猿に感謝し、医者も自分の薬よりも猿がびっくりさせた方が治療に効果的であったことを認めて、猿と握手をする。

画像はおそらくグスタフ・キューン自身が描いたと思われる素朴な絵であるが、動物が主人公になり、喜劇的な展開で、大騒ぎを起こしながら、結局はハッピーエンドに終わるといような点で、20世紀のディズニーのミッキーマウスやドナルドダックという動物ものアニメの先駆けのように思われる。

17 R-1

18 Zaepernick, Gertraud: *Neuruppiner Bilderbogen*, Leipzig, Rosenheimer Verlagshaus, 1982, 2. Aufl., S.63

(5-3) NRGK-02163「まだできたての新しいベルリン・ウィット16題」(16 neue Berliner Witze, noch ganz warm) (1849年発行¹⁹)も異色のボーゲンである。タイトルにもあるように16コマの絵とその下に文字でウィットが掲載されている。文章は散文である。16のウィットのうち、(1)軍隊や役人を扱ったものが6、(2)言葉遊び、言葉の無知、教養のなさが5、(3)犯罪者や、不良、乞食が登場するものが4、(4)その他が2と分類できよう²⁰。

(5-3-1) まず軍隊や役人を扱ったものを見よう。5番目のコマでは直立不動の新兵と椅子に座った上官の大尉が描かれている。新兵は「シュロッターポーンは昨晚、野戦病院で腸チフスのため死亡しました」と報告する。大尉は、「なんてことだ。まだ最後まで訓練を受けていない人間が死亡するなんてことがありえようか」と残念がる。部下が死んだことに心を痛めるのではなく、訓練が最後までできなかったことを嘆くこの上官の言葉は、プロイセン軍の非人間性を問題にしているといえよう。

6番目のコマは強権的国家行政に向けられたものである。画面では路上の二人の男性が描かれている。手に何かを持っている制服姿の男と、二つのカバンのような袋を持ってきて、驚いてこの二つのカバンを地面に落とした市民風の男である。市民は「おや、警察官殿、私の家は一体どこへ行ってしまったのでしょうか」と自分の家がないのに驚く。警官は「国家のために徴収され、取り壊された。でも家のカギはここにあるぞ」と答える。警官が手に持っていたものは取り壊した家の鍵であった。国家のためには、市民の居住する権利など無視しても当然であるという、住民不在の国家至上主義が批判的に扱われている。

9番目のウィットでは、横一列に整列した新兵たちと、手を突き出して威嚇するしぐさの上官とが描かれている。文章は上官の一方的なセリフである。「この田舎者どもめ、このウジ虫どもめ、お前らがわしの言うことをちゃんと聞かず、わしの上着の埃もちゃんと取らないようであれば、絶対に全権を行使して、お前らを歩哨勤務につけてやるからな。」

19 R-1

20 9番目のウィットは(1)と(2)の両方に数えた。

部下たちに「田舎者ども」とか「ウジ虫ども」と怒鳴りつけ、自分の上着をきれいにしておけと要求するこの上官は軍隊の上下関係における非人間的な支配と横暴を示している。しかしウィットの本質は言葉の二重の意味にある。「上着の埃を取る」(jm. die Jacke ausklopfen) という言葉には口語的な慣用表現として「人をさんざん殴る」という意味がある。この上官の権威主義的な態度と、自分を「さんざん殴れ」という上官の要求とが全く乖離しているのでその落差が滑稽さを爆発させている。

11番目のコマは市民たちが横一列になって行進し、その前を軍人のような人物が指揮棒を持って行進の指導をしている様子である。文章はこの軍人の嘆きの言葉である。「もう我慢の限界だ。教授先生、あなたは歩調を合わせることは全くできないのですか。」つまりこの指揮者は市民にパレードの行進を指導しているのだが、一人だけ皆と一緒に歩調を合わさない人がいる。そのため行進がうまくいかないので嘆いているのである。絵を見ると、列の手前から3人目にかっぶくのいい男性がいて、一人だけ片足を上げている。これが教授なのであろう。ここで軍人は登場してはいるが、ウィットの矛先は大学教授に向けられている。大学教授はプロイセンのような軍国主義の国でも、人と一緒に何かをすることができない変人だということであろう。

12番目のウィットは戦場での二人の兵士の会話である。一人が、「たいへんだ、こりゃ爆弾のようだ。こいつが爆発したら、俺たちやおしまいだ」と、そばに爆弾が転がっているのを見て驚く。ところがもう一人は、「それじゃ何かい、敵がオレンジや揚げパンでも撃ってくると君は思ってるのか」と答える。二人目の兵士のセリフが、戦場で爆弾の導火線が火を吹いている緊迫した状況にまったく適合していないので、その不釣り合いが滑稽さを呼ぶのであろう。

16番目のコマには痩せた長身の軍人とでっぴり太った軍人の二人が登場する。痩せた方が太った方に、まっすぐな体形を保つため、胸を出して、腹をひっこめなさい、と忠告するが、太った軍人は、「ご親切に、でも腹が引っ込んでくれさえすれば、いいんだが」と答えるのみである。このウィットは軍隊そのものを批判的に扱っているのではなく、肥満体の人間を滑稽化しようとするものである。

(5-3-2) 言葉の二重の意味の取り違え、外来語などの言葉の無知

から生まれる滑稽な応対を扱うウィットもいくつかある。9番目のコマは軍隊の横暴な上官を扱っているので既に述べたが、これも言葉の二重の意味が面白さのバネである。2番目のコマではビアガーデンのような酒場で瓶とグラスを運んでいる給仕の若い女性とその店へやってきた紳士が立ったまま話をする。紳士は、「いとも麗しいお嬢さん、ここでラム酒を出してもらえますか」と尋ねる。娘は、「いいえ、旦那様、ここは女を口説くところではありません。テーブルに座っていただくだけです」と答える。日本語に翻訳すると、どこが面白いのかまったく理解できないが、「ラム酒を出してもらおう」(man kriegt Rum)という言葉と、「女を口説く」(man kriegt rum)という表現がドイツ語では同じなので、これがこのウィットのポイントである。

7番目のコマでは軍服のような制服を着た人物とリュックを担いだ登山家風の男性の二人が崖の上に立ち、下を見下ろしている。登山家が「ごらんなさい、旦那様。昨年、ここで若いお金持ちの男爵が飛び降り自殺をしたのです」と言う。そのあと軍人が「たぶんメランコリーからです」と言ったのに対し、登山家は、「いいえ、ハルバーシュタット出身ですよ」と答える。軍人がメランコリーから (aus Melancholie) と言ったのに、登山家はメランコリーを地名と間違え、ハルバーシュタット出身 (aus Halberstadt) と答えるとんちんかんなやり取りが笑いの対象となっている。

8番目のコマでは医者と薬瓶を持った下男が立って話をしている。テキスト部分では、使いでやってきた下男が、「先生、私の主人がよろしくとのことで、このマガツィーンを服用すれば、ビールを飲んででもかまわないかどうか、おたずねして来いとのことでした」と医者尋ねる。マガツィーン (Magazin) は「倉庫」とか、「雑誌」の意味であって、当然のことながら服用するようなものではなく、明らかにこの下男はメディツィーン (Medizin、薬) と言うべきところを言い間違えたのである。無知や軽率から生まれる言葉の誤用が笑いの対象とされている。

3番目のコマは単なる言葉における無知ではなく、教養における無知(あるいは捻じ曲げ)が笑いの対象になっている。絵は町の通りで若い女性に対して、男性が言い寄るようなポーズで迫っているところを描いている。テキストでは、男性が「美しいお嬢さん、あなたに腕をさし出

し、ご同行してもかまいませんか」と尋ね、これに対して女性が「おや、こんな明るい昼間から若い紳士と一緒になんてすばらしいじゃありませんか。どこへ行こうと思ってらっしゃるの」と答えている。実は男性のセリフはゲーテの『ファウスト』第1部で主人公のファウストが美しい娘グレートヒェンを誘う場面の有名な言葉である。『ファウスト』ではグレートヒェンは「私は美しくもなく、お嬢さんでもありません。一人で家に帰ります」という返事をして、グレートヒェンの貞潔さが示されている。このボーゲンでは全く逆の返事が返されているわけで、この返事をした女性はゲーテのファウストを知らないことで嘲笑的の的にされている。あるいは、もしこの女性がゲーテを知っていたうえで、逆の返事をしたとすれば、ゲーテ時代の娘が貞節であったのに対し、現代ベルリンの女性は全くのあばずれに変化してしまっていることが問題とされているといえよう。

(5-3-3) 犯罪者、不良、乞食が登場する点においても、このボーゲンは品行方正な世界を描くキューン社の他のボーゲンと異質である。第1のコマは二人の不良の会話である。凍える寒さの中に突っ立っている男に対して、もう一人が、走って体を温めたらどうかと忠告する。これに対して、「そんなこと何の役にも立つものか。競走選手だって凍えていることぐらい俺はちゃんと知ってるんだ」という答えがなされる。このウィットの内容は犯罪行為と何の関係もないが、男たちが仕事もせず、街頭でぶらぶらしていることは、通常の市民生活からは逸脱していることと思われる。

第4のコマでは銀行強盗が描かれている。強盗が金庫から金を取りだそうとしているところへ、銀行家が来て、ピストルを構え、「おい君、すぐにそこから離れないと撃ち殺すぞ」と言う。強盗は、「おや銀行家さん、許して下さい。お休みの所を邪魔したくはなかったのですが、ただ5ターラー紙幣を両替したかっただけです」と、しらばくれようとする。銀行強盗の言い逃れのあまりにも丁寧な言い方が面白いところなのであろう。

13番目のコマは道端で話し合う二人の不良を描きだす。一人が、今日はどんな仕事をしたのかと尋ねる。相手は、「上がったたり下がったりさ。ハンカチ1枚盗んだが、ナイフを失くしたぜ。まったく大した儲けじゃ

ないか」と答える。盗みをなりわいとする不良にとって、ナイフを失くすことは決定的な損失である。これを「大した儲け」と言って強がる言葉がおかしさを生むのであろう。

14番のコマは乞食と紳士の二人の男性が描かれ、乞食が「旦那様、聞いて下さい。どうかご親切に私に少し恵んでくれませんか。私は父も母もない孤児なのです」と訴える。このセリフをまだ幼い子供が言うのであれば滑稽でもなんでもないのであるが、絵を見ると、訴えている男性は、頭が禿げあがり、腰も折れ曲がった老人である。それが「父も母もない孤児」と訴えるところに滑稽さが込められている。このウィットは絵の描写がなければ成立しないという点で、絵と文を一体化するボーゲンならでは傑作であろう。

(5-3-4) 以上の分類に入らないコマは10番目と15番目のものである。10番では二人の葉巻喫煙者が登場し、一人が上等な葉巻を吸っていると言うのに対して、もう一人は安物で我慢していると嘆く。すると上等葉巻の男は「そりゃそうだろう。僕に君のところのようにたくさんの子供がいたら、僕は喫煙などしないよ」と言う。とくに痛快なウィットとは思えないが、扶養家族の負担が嗜好品も大きく左右していることを滑稽だと思っているのだろうか。あるいは喫煙者がほんとに禁煙することなどほとんどあり得ないのに、相手の立場だったらタバコをやめるなどどうそぶく男の軽薄な言葉が面白いのだろうか。

15番は一組の男女の会話で、海の水が塩辛いのは、ニシンがたくさん泳いでいるからという、たわいのないものである。ニシンは塩漬けにして家庭に売られる。その塩辛いニシンがたくさん泳いでいれば、水は塩辛くなるという論理である。身近な事実からすべてを判断しようとする誤った論理がここでは嘲笑的となっている。

おわりに

本稿では、キューン社の中期ボーゲンを取り上げ、主要なテーマを5

つに分けてその特徴を観察してきたが、ボーゲンの世界は多様であり、ここで取り上げたテーマには入らない作品がいくつもある。たとえば、夏、冬などの自然を扱ったもの²¹、あるいはハイキングや、ピクニック（屋外での食事）など自然との協調した生活の楽しみを賛美するもの²²、あるいはトルコの状況を文学テキスト付きで紹介するユニークな作品²³もある。なぜトルコがドイツのボーゲンの対象になるかであるが、出版社側の事情としてはキューン社が地方の存在から、ドイツ全国、さらに国際的な問題まで守備範囲を拡大したことの表れであろう。19世紀中葉ともなればヨーロッパ列強が植民地獲得を巡って争い出す時期でもあり、ドイツ国民の関心も徐々に外国へと向かいつつあった。クリミア戦争（1853-56）はロシアとトルコの戦争であったが、フランスとイギリスはロシアの南下を阻止するためトルコに味方し、ロシア軍を敗退させた。こうして高まったヨーロッパのトルコへの関心を利用して、キューン社は面白おかしくトルコの最新事情を伝えたのである。作品は、戦後トルコに駐留しているフランス軍を取り上げている。フランス人はたいへんスマートにトルコの女性たちにすり寄り、これまでたくさんの婦人たちを独占してきたハーレムの支配者の男性たちと対立しているという内容である。アジア的な生き方とヨーロッパ的な生き方の違い、ヨーロッパの進出とアジアの近代化など面白いテーマがあり、ボーゲンの歴史の上でも重要な作品であると考えますが、これを詳しく検討するのは紙面の都合で別の機会に譲りたい。

[追記] 本論文は、科学研究費・基盤研究（C）「ドイツにおける大衆的文学・芸術の発展——ベルリンの大衆芸術」（課題番号：21520355、研究代表者：宇佐美幸彦）の助成を受けて執筆された。

21 例えば、NRGK-02380, NRGK-02385, NRGK-03111など。

22 NRGK-02503, NRGK-04983など。

23 NRGK-02871, NRGK-02872など。

Die Bilderbogen mit literarischen Texten von Gustav Kühn in der Mitte des 19. Jahrhunderts

Yukihiko Usami

In der vorliegenden Arbeit werden die Bilderbogen behandelt, die mit literarischen Texten versehen sind und im Zeitraum zwischen ungefähr 1848 und 1870 von Gustav Kühn veröffentlicht wurden. Die größten Teile der wichtigen Kühnschen Bilderbogen dieser Zeit kann man nach den inhaltlichen Angaben in 5 Gruppen gliedern: (1) Liebe, (2) die glückliche Familie, (3) Probleme der Liebe in der Gesellschaft und im Familienleben, (4) junge Frauen und Arbeit, (5) Witze und Scherze.

In den Bilderbogen mit dem Thema „Liebe“ wird meistens ein schönes Mädchen oder ein glückliches Liebespaar dargestellt und unter dem Bild ein romantisches Liebesgedicht abgedruckt. Unter diesen volksliedhaften Texten sind auch sehr bekannte Gedichte, die von berühmten Dichtern verfasst wurden: „O, mein Engel, wie lieb ich dich“ (NRGK-02394) wurde von K. Fr. Mächler geschrieben, „Wenn man mir ein Mädchen nennt“ (NRGK-02396, -02990) von Ch. F. Weiße, „Ach, wüßten's die Blumen, die kleinen“ (NRGK-02990) von H. Heine, „Die Nähe des Geliebten“ (NRGK-02991) von J. W. von Goethe, „Ich ging im Mondenschimmer“ (NRGK-02991) von Fr. L. Graf zu Stolberg-Stolberg usw. Diese Entlehnung bekannter Texte ist sicherlich in der Absicht des Verlags geschehen, durch die Bekanntheit und Vertrautheit der volkstümlichen Lieder das Absatzgebiet zu vergrößern. In den meisten Bildern wird, unabhängig von den Versen, die öfters die Leiden der unglücklichen Liebe darstellen, die Schönheit einer weiblichen Figur oder das Glück des liebenden Paares mit reichlichem Blumenschmuck betont. Es gibt deutliche Widersprüche zwischen den Versen und den Bildern. An der Stelle der ernsthaften Substanzen der Romantik wie des „Weltschmerzes“, der „ewigen Wanderschaft“ oder der „inneren Spaltung“ in den Versen treten in den Bildern die Affirmation der gegenwärtigen

tigen Lage und die kleinbürgerliche Zufriedenheit.

Diese affirmative Haltung kann man auch in den Bilderbogen beobachten, die das Familienleben behandeln. Das zeigen schon die Titel einiger Werke, wie „Eheliches Familienglück“ (NRGK-04344), „Elternfreude“ (NRGK-02756), „Mutter und Kind“ (NRGK-03175) usw. Im Bilderbogen NRGK-04343 wird ein erwünschtes Brautbild dargestellt. Viele einseitige Wünsche von der Seite des Ehemanns werden hier in den Ausdruck gebracht, wie „Hold muß mein Weibchen sein“ oder „kein gelehrtes Weib (soll) mich je besiegen.“ Diese Erwartungen sind weit entfernt von der Gleichberechtigung beider Geschlechter. Man kann daran sehen, dass die glückliche Liebe und die Zufriedenheit im Familienleben in den Kühnschen Bilderbogen auf dem Opfer, dem Gehorsam und der Geduld der Frauen gebaut waren.

In wenigen Bilderbogen treten jedoch auch Probleme der Familie auf. In NRGK-04263 will ein braver Schneider seine sieben Töchter vermählen, weil es zu wenig Nahrung gibt und weil es zu schwer ist, seine Töchter zu unterhalten. Im Refrain klingt die Klage so: „Die Zeiten werden schlechter,/ Die Beutel werden leer.“ In NRGK-02812 werden sogar „Ansprüche der modernen Frauen“ kundgegeben. Die Frau hier ist nicht gehorsam, sonder äußert deutlich ihre eigenen Meinungen. Einerseits kann man sie als eine frühzeitige Repräsentation der Frauenemanzipation interpretieren. Andererseits ist es aber auch möglich, dies so aufzufassen, dass dieser Bilderbogen als Spaß oder als schlechtes Muster verstanden werden soll.

Während die meisten Frauen bei Kühn abhängig von den Männern sind und keinen Beruf haben, treten in wenigen Bilderbogen arbeitende Frauen auf, wie NRGK-02615 „Die Näherin, die Strickerin“, NRGK-03088 „Befehlen Sie, mein Herr“, NRGK-03121 „Die Gemüsehändlerin“, NRGK-03122 „Das Blumenmädchen“, NRGK-03124 „Die Kellnerin“, NRGK-03126 „Das Schenkmädchen“ usw. Diese Figuren werden zwar auch als Schönheiten dargestellt, wie die prächtig geschmückten Frauen in den Bilderbogen der Liebe, aber sie sind viel

kräftiger als die letzteren. Die Gebiete, auf denen die Frauen arbeiteten, waren freilich sehr beschränkt, nur auf den Gebieten der Bedienung, des Verkaufs und der häuslichen Industrie.

Unter den Bilderbogen, die Witze und Scherze behandeln, sind sehr interessante Werke. In NRGk-02163 „16 neue Berliner Witze, noch ganz warm“ wird auch Kritik an der Obrigkeit geäußert und es werden Szenen mit Verbrechern dargestellt, was in den die Gegenwart bejahenden und die Moral des Bürgertums zeigenden Kühnschen Bilderbogen sonst sehr selten geschieht. Die Eigenmächtigkeit der Armee wird kritisch behandelt. Bei einigen der 16 Bilder gelingt es gut, dass Bild und Text miteinander effektiv mitwirken.

In den Jahren zwischen 1848 und 1870 entwickelte sich die Firma von Gustav Kühn zu einem repräsentativen Bilderbogenverlag in ganz Deutschland. Die Bilderbogen mit schönen Mädchen kann man als Genrebilder mit den japanischen „Ukiyoe“ vergleichen. Die moralische Haltung des Bürgertums im 19.Jh. wird in den meisten Bilderbogen durchgesetzt. Aber in einigen Werken werden auch moderne Familienverhältnisse vorweggenommen, und es wird Kritik an der Gesellschaft und Mitleid mit den unteren Schichten zum Ausdruck gebracht.